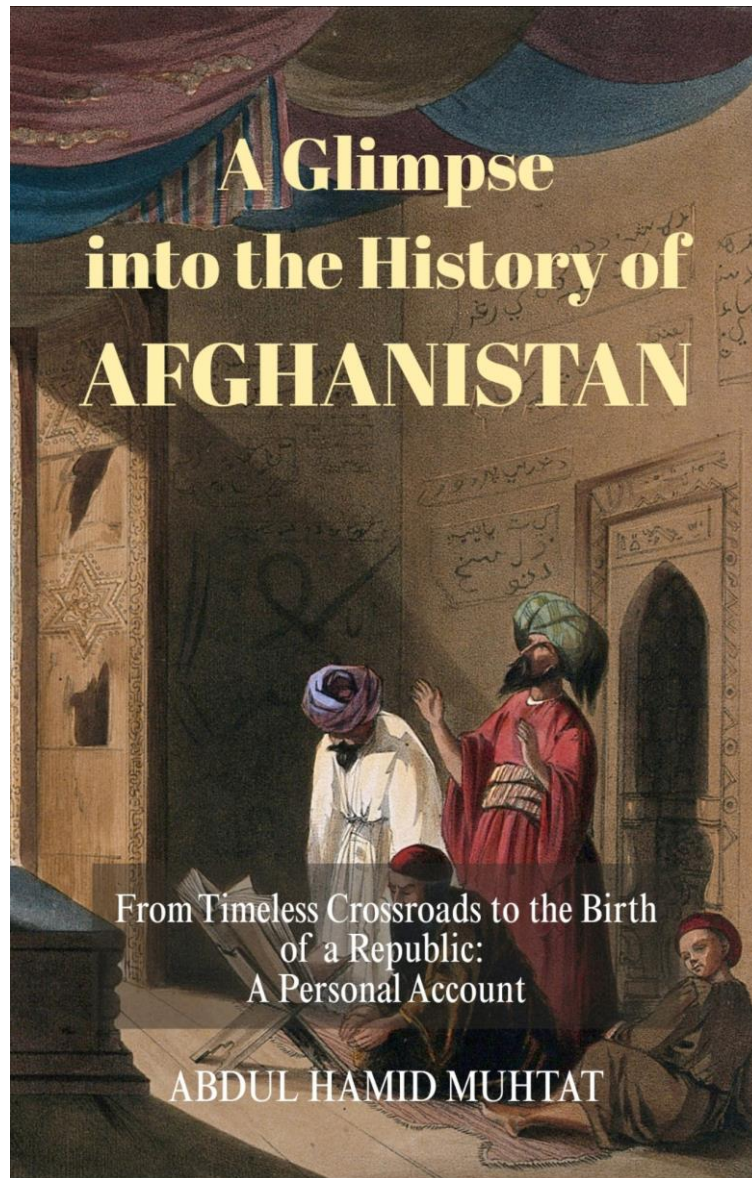


アフガニスタン史小景

悠久の十字路から共和国の誕生まで



著者：アブドウル・ハミド・ムータット (Abdul Hamid Muhtat)
(アフガニスタン共和国最後の副大統領)

発行：バルマキッズ・プレス (Barmakids Press)

目次

=====

序文

第1章 王朝と帝国

アレクサンドロスからバーブルへ——征服と文化的融合

ゾロアスター教の出現

アケメネス朝の支配とその影響

アレクサンドロス大王とヘレニズムの影響

スキタイ人とパルティア人

クシャーナ朝と仏教の拡大

啓明君主カニシカ

サーサーン朝とその遺産

イスラーム征服と抵抗運動

サーマーン朝の台頭

ガズナ朝とグール朝

モンゴルの侵入とティムール朝の支配

第2章 ドゥッラーニー帝国の興隆

建国の君主アフマド・シャー・ドゥッラーニー

ムガル・サファヴィー間の抗争

アフマド・シャー・ドゥッラーニーの即位

ティムール・シャー・ドゥッラーニーの統治と課題

ザーマーン・シャー・ドゥッラーニーの治世と外的脅威

第3章 激化するグレート・ゲーム

イギリスの策謀とバラクザイ王朝

ドースト・ムハンマド・ハーンの台頭

第1次アングロ＝アフガン戦争

ドースト・ムハンマド・ハーン第2の統治

シャー・アリー・ハーンの即位

第2次アングロ＝アフガン戦争

アブドゥル・ラフマーン・ハーン——少数民族政策とデュランド協定

第4章 改革の新しい夜明け

近代化と闘争——アイデンティティを求めるアフガニスタン

アマーヌッラー・ハーンの即位

第3次アングロ＝アフガン戦争——主権と承認を求めて

アフガン＝ソ連友好条約

近代化努力と保守派の抵抗

アマーヌッラー・ハーンの欧州歴訪と退位

第5章 諸王の間奏曲

ハビーブッラー・カラカーニーとナディール・シャーの短い治世

ハビーブッラー・カラカーニーの台頭——論争と遺産

ハビーブッラー・カラカーニーの失脚——裏切りと処刑

ナーディール・シャーの治世——保守政策と民族政治戦略

第6章 最後の君主

ザーヒル・シャーの即位——叔父たちの苛烈な支配から改革への模索へ

パシュトゥーン化と民族政治——ハーシム・ハーン時代

同盟と中立

シャー・マフムードの改革期

パシュトゥーンニスターン問題——アフガニスタンに残る難題

民主化改革と課題

ダーウード・ハーン首相——変革と緊張の時代

憲法改正と政治的多元主義

第7章 共和国の夜明け

ダーウード・ハーンの構想と挑戦

ソ連とアフガン軍士官候補生

危機の激化

変革の前奏

ダーウード・ハーンとの会談
クーデター計画の立案と準備
無血の権力移行
新共和国の試練
王族拘束のジレンマ
王政後の政治的同盟
パキスタンとの波乱に満ちた関係
第1共和国の終焉
ソ連の影
第1共和国崩壊の要因
私の大使任命と回想
過去からの教訓と未来への希望

序文

私はこの小著を、共和国創立 52 周年にあたる 7 月 17 日に編んだ。アフガニスタンは 1973 年に共和国となり王制は廃止された。私は第 1 共和国樹立に関わった現役軍将校として、ダーウード・ハーン大統領の最初の内閣に参加し、その後の政権でも要職を務める機会を得た。ゆえに最後の章は他と文体を異にし、私自身の体験を第一人称で記したものである。

公職にあったこととは別に、私は常に祖国の歴史に強い関心を抱いてきた。熱心な歴史愛好家として、英語・ロシア語・ペルシャ語、そして一部パシュトゥー語の史料を渉猟してきた。しかし多様な視点や解釈を比較する中で、歴史の歪曲がしばしば行われてきたことに気付いた。とりわけ地元の学者の中には、支配層や所属民族の利益に奉仕するために歪んだ叙述を行う者が少なくなかった。

現在「アフガニスタン」と呼ばれるこの国の歴史は悠久にわたり豊かである。しかし近代においては、その真の遺産は歪曲、狂信、教条主義、宗教的原理主義に覆い隠され、時にメディアによってさらに増幅されてきた。この半世紀、共和国の理念と志は守られず、祖国は暗黒時代へ逆戻りするかのような道を歩んできたことに私は痛みを覚える。

こうした課題を踏まえ、私は本書を簡潔にまとめた。本書はアフガニスタン史の網羅的叙述ではなく、多くの人名や事件を意図的に省いている。本書の目的は、この地域に関心を抱く人びとの好奇心を喚起し、より一層の学びへの一步を提供することである。本書をきっかけに、読者がアフガニスタンの過去をより深く探究し、この国の苦闘と平和・安定への歩みを理解する助けとなることを願う。

私はできる限り客観性を保つよう努めたが、政治に関わった経歴ゆえに、ある種の主観がにじみ出ていると感じる読者もいるだろう。それでも、本書がアフガニスタンの豊かな過去を見渡すための有意義な視座を提供し、より高みへの研究の契機となることを信じている。

アブドゥル・ハミド・ムータット

2025 年 7 月 17 日

ドイツ・シュトゥットガルトにて

第1章：王朝と帝国

アレクサンドロスからバールまで：征服と文化的融合

アフガニスタンの歴史を垣間見ること、異なる時代においてこの地域がきらびやかで輝かしい歴史のページを持っていたことが明らかになる。アフガニスタンは、その豊富な歴史資料と考古学的遺物によって、世界の他地域の歴史を補完する役割を果たしてきた。

この歴史の物語を掘り下げると、文明同士の複雑な交差と影響の関係が明らかとなる。アフガニスタンは文明の十字路として、多くの文学、芸術、哲学の遺産を残してきた。アフガニスタンの物語は、単なる支配者や帝国の物語にとどまらず、文化的融合と人びとの粘り強さを語るものであり、その声は現代にまで響いている。

ゾロアスター教の出現

今日「アフガニスタン」と呼ばれる地域の歴史がいつ始まったのか、あるいはどの時代に遡るべきかについて、学界の見解は一致していない。しかし、古代バクトリアにおけるゾロアスター（ザラスシュトラ（ツァラトゥストラ））の出現は、ひとつの大きな節目であり、その後に続く文化的・歴史的な最盛期への道を切り開いた出来事であった。

多くの学者は、ゾロアスターが紀元前 1700 年から 1000 年頃に生きたと考えている。この推定は、ゾロアスター教の聖典『ガーサー（古アヴェスター語）』と『リグ・ヴェーダ（サンスクリット語）』の言語的類似性に基づいている。

ゾロアスターは、善（アフラ・マズダー）と悪（アーリマン）の二元論に基づく宗教的教義を創始し、「善き思い・善き言葉・善き行い」という 3 本柱によって、善が最終的に勝利すると説いた。彼は自らの教えを『アヴェスター』という書に記し、人びとに神を崇拝するよう説いた。アフガニスタンのヒンドークシュ山脈の一部には、今なお古代ゾロアスター教の儀式が守られている地域も存在する。

ゾロアスターは当時の地方統治者であったヴィシュタスバ王を改宗させることに成功し、強力な支援者を得た。ヴィシュタスバの支援により、ゾロアスター教はアーリア系部族の間に広まっていった。当時のアーリア系部族は、社会経済的に国家の形成が必要とされる段階に至っていた。

当時はまだ文字が存在しておらず、『アヴェスター』はサーサーン朝時代（西暦 226～651

年)に至るまで書き記されることはなかった。しかし、その内容は口伝によって何世代にもわたり保存されてきた。

アーリア部族によるこの口承文化は、文字を持たない時代においても文化的・宗教的遺産を保持し続ける重要性を物語っている。この伝承手法により、ゾロアスターの教えは時代を超えて生き続け、地域の精神的・社会的基盤として根付いた。

紀元前6世紀初頭より、ゾロアスター教はこの地域で最も主要な宗教となり、サーサーン朝時代には国家による保護も受けるようになった。ゾロアスター教の火の神殿「アタシュカダ」のうち、バルフのナウバハール（ナヴァ・ヴィハーラ）やバクトリアのスルフ・コタルが著名である。これらの宗教施設には各地から巡礼者が訪れ、王や神殿の守護者たちは高い尊敬を集めていた。

サーサーン朝の王たちは、特にシャープール1世（西暦240～270年）の治世中に、これらのアタシュカダの建設に力を入れていた。

アケメネス朝の支配とその影響

口承の時代から文字による歴史記録の時代へと移行する中で、われわれはアケメネス朝帝国（紀元前550年～330年）がもたらした劇的な変化に出会う。この帝国はキュロス大王によって建国された。キュロスの軍事遠征は、バクトリアの政治構造を変革し、この地域をアケメネス朝帝国の広大な領土に統合した。

その結果、現在のアフガニスタンに相当する地域は、バクトリアナ、アーリア、マルギアナ、ガンダーラ、ドラギアナ、アラコシア、サッタグディアという7つの行政単位に再編成された。このような行政組織の導入は、より中央集権的かつ統一された統治体制への移行を意味しており、後の帝国支配の基盤を築くものでもあった。

アレクサンドロス大王とヘレニズムの影響

キュロスによるアケメネス朝の統治体制が築かれたのち、この地域はやがて歴史上最も名高い征服者のひとり、アレクサンドロス大王によって征服されることになる。

紀元前330年、アレクサンドロス大王は東方遠征の途中でアケメネス朝の王ダレイオス3世と対峙し、数々の戦闘を繰り広げた。ダレイオスはアレクサンドロスの執拗な攻撃に耐えきれず、戦場から逃走するが、彼の属州総督のひとりであるベッソスによって殺害される。これによりアケメネス朝の抵抗は終焉を迎えた。

アレクサンドロスの軍勢は現在のアフガニスタンに相当する地域を横断する中で、その文化と地理に消しがたい影響を与えた。アレクサンドロスは、アラコシア（現在のカンダハール）、アーリア（現在のヘラート）、オクソス（現在のアイ・ハヌム近郊）、カウカソス（現在のバグラム近郊）などに「アレクサンドリア」と呼ばれる複数の要塞都市を建設した。これらの都市は軍事拠点としてだけでなく、ギリシャ文化の発信地としても機能し、ギリシャと現地文化の融合を促す場となった。これにより、ヘレニズムと地元文化が融合した独自の文化が形成され、数世紀にわたりこの地に影響を与えた。

アレクサンドロスの死後、その広大な帝国は分裂し、セレウコス1世ニカトルのもとでセレウコス朝が旧アケメネス領を支配することになった。一方、プトレマイオス1世はエジプトにプトレマイオス王朝を築き、リュシマコスはマケドニアの一部を掌握した。こうして、アレクサンドロスの帝国は彼の将軍たちによって分割された。

その結果、現在のアフガニスタンにあたる地域はセレウコス帝国の一部であるバクトリア総督セレウコスの支配下に入った。しかし、インドのマウリヤ朝を創設したチャンドラグプタ・マウリヤがヒンドークシュ山脈の南部を占領し、この地域を支配下に置いた。

グレコ・バクトリア（ギリシャ＝バクトリア）文化はこの時代に最盛期を迎え、日常生活の中でギリシャ語が使われるようになった。統治はギリシャ系住民の子孫たち——ディオドトスやデメトリオスのような人物——によって行われた。アムダリヤ川とコクチャ川の合流点に位置する都市アイ・ハヌムで発見された遺跡は、この時代のヘレニズム様式の建築の影響を如実に示している。

スキタイ人とパルティア人

グレコ・バクトリア王国の衰退に続き、この地域では遊牧民であるスキタイ人およびパルティア人が台頭した。北方から侵入してきたスキタイの諸部族は、紀元前2世紀末までにバクトリア王国を崩壊させた。アムダリヤ川を最初に越えたのは、スキタイ系の分派であるサカ族であった。スキタイ人は、ハンガリー平原からモンゴルに至るまで広がるユーラシア地域で広範な影響を及ぼしたことで知られており、この地域の政治情勢の形成にも重要な役割を果たした。

現代の「スィースターン（Sistan）」という地名は、実はこの「スキタイ（Saka）」に由来するものであり、スキタイ部族がこの地域に支配権を持っていたことを示している。アフガニスタン西部の領域は、のちにパルティア人によって奪われるまで、しばらくの間スキ

タイ人の支配下に置かれていた。

スキタイおよびパルティアの支配時代は、絶え間ない戦闘により文化的・文学的发展が妨げられた時期でもあった。戦争と領土争いが絶えなかったため、この時代に関する文書記録は極めて少なく、断片的な情報しか残されていない。しかし、この混乱の時代が収束に向かうにつれ、歴史の流れを大きく変える新たな勢力が台頭しようとしていた。

クシャーナ朝と仏教の拡大

匈奴（Xiongnu）として知られる勢力がパルティア人を打ち破り、月氏（Yuezhi）5部族のひとつであったクジュラ・カドフィセス（Kujula Kadphises）が頭角を現した。中国では「貴霜（Gui-shang）」として知られるクジュラ・カドフィセスは、権力を巧みに統一し、後世に長く影響を残す王朝を築いた。首都を現在のペシャワール（ペシャワール）にあたるプルシャプura（Purushapura）に定め、クシャーナ朝（Kushan Empire）は強大な勢力として登場した。これにより、仏教の拡大と芸術的革新の時代が訪れ、数世紀にわたってこの地域の文化的景観を形づくることになった。

賢帝カニシカの治世

クシャーナ朝の偉大なカニシカ王（Kanishka）は、127年から151年にかけて在位し、仏教の布教と発展に尽力した。彼はカシミール地方のスリナガル近郊で第4回仏教結集（Council）を主催し、約500名の学僧が参加した。この結集では、仏教諸派の間で生じていた doctrinal（教義上の）対立が調整され、新たな解釈と注釈がまとめられた。ここで形成された思想が、大乘仏教（Mahayana）として東アジア全域に伝播することになる。

カニシカ王の時代に建設されたスルフ・コタル（Surkh Kotal）やラバタク（Rabatak）などで発見されたふたつの石碑は、クシャーナ朝の実態を理解するうえで非常に重要である。カニシカ王の治世初年に命じられた「ラバタク碑文」は、クシャーナ朝時代に関する驚くべき詳細を明らかにした。第4行には、彼の使用言語が「バクトリア語（碑文中ではアーリア語と記されている）」であり、これは東イラン語群に属する言語であると記されている。次に、彼の支配領域として、サケータ、カウサンビ、パータリプトラ、チャンパの諸地域が挙げられている。

最後にカニシカ王は、自ら以前に王位にあった人物として、曾祖父クジュラ・カドフィセス、祖父ヴィマ・タクトゥ、父ヴィマ・カドフィセスの名を列挙している。

カニシカ王の治世中、帝国内には多くの仏教寺院や僧院が建設された。その中でも特に注目すべき遺跡が、現在のアフガニスタン・ローガル州にあるメス・アイナク（Mes Aynak）

である。この場所は近年、多くの考古学的発見がなされたが、同時に鉱山開発によって破壊の危機にもさらされている。この時期には、ヴェーダ文化やアヴェスター文化など、さまざまな文化要素がアケメネス朝、ギリシア、インド、仏教の諸文明と融合し、豊かな文化的モザイク（織物）のような世界が形成された。

クシャーナ朝時代の遺産のもうひとつの象徴的発見が、アフガニスタン北部のティリヤ・テペ（Tillya Tepe）である。この地名はペルシャ語で「黄金の丘」を意味し、1970年代に一連の豪華な墓所（通称：バクトリアの財宝（Bactrian Hoard））が発掘されたことで国際的な注目を集めた。この墓所からは、精緻に作られた金の装飾品やコイン、その他の貴重な遺物が発見され、紀元前1世紀から紀元1世紀にかけての高度な工芸技術と交易の広がりを示している。これらの発見は、クシャーナ朝の物質文化、交易ネットワーク、そして周辺地域との交流関係を理解する上で非常に重要な手がかりとなっている。

カニシカ王の治世下で、クシャーナ帝国は東西を結ぶ交易網であるシルクロードの繁栄において決定的な役割を果たした。この時期、シルクロードはその影響力の最盛期を迎え、現在のアフガニスタンはこの大陸横断交易路の中心に位置していた。中央アジア・南アジア・中東を結ぶその戦略的な地理的位置により、アフガニスタンは商人や交易者、旅行者たちにとって極めて重要な拠点となっていた。

シルクロードは、物資の移動だけでなく、思想・文化・技術の交流も促進した。絹や香辛料、貴金属などを積んだキャラバン（隊商）は、この地域の険しい地形を越えて行き来し、地域経済の発展に大きく寄与した。交易によって流入した富は、にぎやかな市場や繁栄する都市の形成を促し、拡大する交易網を支えるためのインフラ整備を進展させた。

さらに、シルクロードがもたらした文化的影響はきわめて深遠であった。現在のアフガニスタンの地は、多様な文化が交わる坩堝（るつぼ）となり、世界各地の芸術・宗教・知識がここで融合した。カニシカ王によって積極的に保護・奨励された仏教は交易路に沿って広まり、多くの僧院が建立され、ヘレニズムとインド的要素が融合した仏教美術が生み出された。また、シルクロードを通じた思想の交流は、科学・医学・技術の進歩をも促し、この地域の知的世界をいっそう豊かにした。

クシャーナ朝時代には、バクトリア地方で仏教徒、ゾロアスター教徒、そしてギリシア神々の崇拝者たちのあいだに、今日われわれが目にするような宗派間・宗教内の敵対とは対照的に、顕著な調和と平和的共存が見られた。西暦130年ごろのスルフ・コートル遺跡から出土した遺物は、クシャーナ人とグレコ＝バクトリア文化の伝統が、この地域の思想や文化の形成において重要な役割を果たしていたことを示している。

この時代の仏教美術の象徴として最も有名なものが、バーミヤン渓谷の大仏である。これらの巨大な仏像は、6世紀に建立されたもので、高さはそれぞれ55メートルと38メートルを誇った。一部の史料では、建立は4世紀あるいは5世紀から始まったともされている。残念ながら、これらの仏像は2001年にターリバーンによって爆破・破壊された。バーミヤンの仏像は、ガンダーラ美術と仏教彫刻の融合を象徴しており、アフガニスタンの多文化的歴史を物語る重要な遺産であった。

5世紀中頃、エフタル（白匈奴）として知られる遊牧民族がソグディアナを征服した。彼らはアムダリヤ川を越えて、ヒンドークシュ山脈の北側にあるバクトリアと、南側のガンダーラ地方をも征服した。ガンダーラは、かつてグレコ・バクトリア美術（ガンダーラ美術）が発展した地域である。

エフタルはその後、ガンジス川流域にまで勢力を拡大したが、西からのサーサーン朝の圧力と、北からのトルコ系部族の攻撃によって、最終的にはその支配を維持することができなかった。

アフガニスタンが位置する地域は、歴史上多くの征服と政権交代を経験してきた。各時代において、様々な帝国がこの地域を支配しようとしたが、いずれの勢力も恒久的な支配権を確立することはできなかった。このような繰り返しは、アフガニスタンという地が持つ戦略的価値ゆえに、常に外部からの干渉や征服の対象となってきたことを物語っている。つまり、この地の歴史的・政治的構造は不安定で多層的であるという特徴を持っている。

サーサーン朝とその遺産

サーサーン朝（224年～651年）は、文化・政治・文学の面で非常に重要な貢献を残した帝国である。この時代には、中期ペルシャ語（パフラヴィー語）が文学および行政の共通語として発展し、後にペルシャの国民的叙事詩『シャー・ナーメ』（王書）にも取り入れられた。

サーサーン朝は、官僚制度の整備や行政機構の発展においても後のイスラーム国家に大きな影響を与えた。サーサーン朝の建築・美術は非常に洗練されており、特に岩の浮彫（ロックレリーフ）やクテシフォンの宮殿などが有名である。

サーサーン朝の文化的遺産は、その滅亡後も長く生き続け、イスラーム黄金時代における

政治・文化の基礎として取り入れられていった。つまり、この帝国の影響力は、宗教的・民族的な転換を超えて、アフガニスタン地域の歴史とアイデンティティに深く根付いたものであった。

イスラームの征服と抵抗運動

この地域の権力構造は、イスラーム征服の到来によって劇的に変化した。西暦7世紀、アラブ軍はすでに現在のイランを征服し、サーサーン朝を滅ぼしたのち、その勢力を現在のアフガニスタン地域へと向けた。しかし、他地域での急速な勝利とは異なり、アラブ軍はこの地で現地住民による激しく勇敢な抵抗に遭遇した。この粘り強く勇猛な抵抗によって、アラブ勢力のヒンドークシュ山脈南部への進出は9世紀まで遅れることとなり、外来の征服に対するこの地域の人々の強靱な精神を如実に示すものとなった。

アッバース朝時代、アラブ帝国が分裂の途をたどるなかで、この地域には抵抗の芽が育ち始めた。ターヒル朝とサッフアール朝によって主導された解放運動の勃興は、勢力均衡における大きな転換点を示した。西暦871年、ヤアクーブ・ライスによるカーブルの奪取は、アラブ支配に対する反抗の勢いがいよいよ高まっていたことを象徴している。こうした動乱と独立への希求の只中で、この地域の文化的・政治的景観に永続的な影響を残す新たな王朝が登場する舞台が整えられたのである。

サーマーン朝の台頭

9世紀中頃、アッバース朝の支配力が弱まる中で、イラン系王朝であるサーマーン朝が中央アジア地域で台頭した。創始者はイラン系貴族のサーマーン・フダーであり、この王朝はアラブ支配後にペルシャ文化を復興させた点で高く評価されている。サーマーン朝の首都であるブハラは、イスラーム学問・芸術・科学の中心地となり、ペルシャ文学が大きく発展した。この王朝の支援を受けて、詩人や知識人が数多く集まり、後世にまで影響を与える文化の礎を築いた。

ここで言う「イラン系」とは、現在のイランという国の範囲を超えた、広範な文化圏を意味する。この地域にはペルシャ人、メディア人、パルティア人、タジク人、クルド人、ソグド人などの民族が含まれ、何千年にもわたり共通の言語的・文化的背景を持ってきた。サーマーン朝の領土は、現代のイランの外に広がっており、現在のアフガニスタン、ウズベキスタン、タジキスタンなども含まれていた。

サーマーン朝の支配下で、この地域は安定と繁栄の時代を迎えた。サーマーン朝時代に任命された地方総督たちは、秩序の維持と経済発展の促進に重要な役割を果たした。

しかし、アルプティギーンが率いるテュルク系のガズナ朝の台頭は、サーマーン朝の終焉の始まりを告げる出来事となった。

ガズナ朝の軍事的強勢に加え、北方からのカラ・キタイ（西遼）トルコ族の圧力が重なったことで、サーマーン朝は次第に衰退し、やがて崩壊へと至った。しかしその滅亡にもかかわらず、サーマーン朝はこの地域に永続的な遺産を残した。とりわけ文化・文学・統治の分野において、その影響は後にこの地で興隆する諸王朝にも受け継がれていった。

ガズナ朝とゴール朝の登場

ガズナ朝（Ghaznavid Dynasty）は、トルコ系將軍アルプティギンの後継者であるスルタン・マフムード（Sultan Mahmud）が、997 年に即位したことで本格的な拡大期を迎えた。彼は当時のイスラーム世界において最も名声の高い支配者のひとりであり、バグダードのアッバース朝カリフも彼をイスラーム世界の正統な指導者として承認した。

スルタン・マフムードの治世下で、ガズナ朝は文化的・知的ルネサンスの時代を迎えた。この時期の最も重要な成果のひとつが、フェルドウスィーによるペルシア叙事詩『シャー・ナーメ（王の書）』の完成である。この壮大な作品は西暦 1010 年ごろに完成し、ペルシア文学史上最大の偉業のひとつとされている。物語はペルシアの神話と歴史を織り交ぜた壮麗な叙事詩であり、数世紀にわたるアラブ支配ののち、ペルシア語とイラン的アイデンティティの再生に決定的な役割を果たした。

ガズナ朝はまた、科学・数学・天文学の分野にも大きな貢献を残した。スルタン・マフムードの庇護のもとで多くの学者や科学者が活躍し、イスラーム黄金時代の豊かな知的遺産の形成に寄与した。

スルタン・マフムードの後継者たちは、その後およそ 125 年間にわたりこの地域で権勢を保った。やがて、セルジューク・トルコがヘラートおよびホラーサーン南東部へと支配を拡大した。さらに 1 世紀余りを経て、ガズナ朝の支配は衰退し、現在のアフガニスタン中

部山岳地帯を中心に勢力を築いたゴール朝の台頭によって取って代わられた。

ゴール地方を起源とするゴール朝は、インド亜大陸へのイスラーム文化と教義の拡大において極めて重要な役割を果たした。彼らは北インドの一部にまで及ぶ大帝国を築き上げた。とりわけヘラートにおけるゴール朝の文化的・芸術的貢献は顕著であり、イスラーム美術と建築の発展を促し、後の時代にこの地域で花開く文化的伝統の基盤を築いた。

ゴール朝のもとで、ヘラートは学問と文化の中心地として繁栄し、イスラーム世界各地から学者や芸術家を引き寄せた。王朝による芸術への手厚い庇護のもと、精緻な写本、緻密な金属工芸、そして壮麗な建築作品が生み出された。代表的なものに、ヘラートの金曜モスクやジャーム（ジャム）のミナレットが挙げられる。これらの偉業は、この地域の文化的景観を豊かにするのみならず、後のイスラーム文明にも長く影響を与える不朽の遺産となった。

しかし、この繁栄と文化的発展の時代は、やがて新たに出現した強大な勢力によって覆い隠されることになる。モンゴルの侵攻とチンギス・ハーンの登場は、この地域に大きな変革の時代をもたらした。それは、長年にわたって築かれてきた遺産の体系的な破壊と社会的動揺、そして変容を特徴とする新時代の幕開けであり、この地の歴史の進路を永遠に変えてしまう出来事となった。

モンゴルの侵略と破壊の時代へ

ゴール朝最後の君主は、1215年にホラズム・シャー朝のスルタン、アラーウッディーン・ムハンマドによって打ち倒された。その後、チンギス・ハーン率いるモンゴル軍が中央アジアに侵攻し、現在のアフガニスタンを含む広範な地域がモンゴル帝国の版図に組み込まれることとなった。

チンギス・ハーンの侵攻は表向きにはホラズム・シャー朝のスルタン・ムハンマドとの対立を口実としていたが、その結果として起こったモンゴル軍の侵入は、繁栄を誇っていたホラーサーン文明に壊滅的な破壊をもたらした。

歴史を通じて、ホラーサーン（ペルシア語で「太陽の昇る地」を意味する）は、現在のイラン東部、アフガニスタン、そして中央アジアの広大な地域を包含していた。この地はたびたび外敵の侵入を受け、そのたびにさまざまな形で影響を被ってきた。「ホラーサーン」

という名称は、サーサーン朝時代以降に広く用いられるようになった。

13世紀初頭のモンゴルの侵攻は、特に破壊的なものであり、広範な荒廃と甚大な人命の損失をもたらした。それ以前の侵入とは異なり、モンゴル軍が与えた損害は深刻で、彼らは国家の基盤を体系的に破壊し、この地域の文化的・政治的景観に長く癒えぬ傷跡を残した。

1370年、アミール・ティームール（タメルラン）がアムダリヤ川を渡ったとき、ホラーサーンは再びその地政学的重要性ゆえに翻弄されることとなった。彼の遠征は征服と破壊の戦役としてこの地域に及び、ティームール軍はヘラート、カーブル、カンダハールといった要衝を次々に制圧し、支配を確立した。これらの戦略的都市の占領は、ティームールの卓越した軍事力を示すだけでなく、のちに彼がインドへと勢力を拡大する道を開くものでもあった。ホラーサーンにおけるティームールの戦役がもたらした荒廃は、暴力的手段によって征服地を服従させ、再編するという彼の広範な戦略を象徴するものであった。

ホラーサーンは、その戦略的な地理的位置と豊かな文化遺産ゆえに、古来より侵略と紛争の焦点となってきた。とりわけ、この地は3人の著名なテュルク系征服者——13世紀初頭のチンギス・ハーン、14世紀後半のアミール・ティームール、そして16世紀初頭のバーブル——の侵攻によって大きな被害を受けた。これらの侵攻はいずれもホラーサーンの歴史における激動の時代を画し、広範な破壊と政治的勢力の転換を特徴づける出来事となった。

チンギス・ハーンとアミール・ティームールの血を引くと称したバーブルは、西暦1504年にカーブルを攻略して拠点とした。彼の勢力はヘラートにも及んだが、その支配は必ずしも確固たるものではなかった。1526年、バーブルはインドへの遠征を敢行し、パーニーパットの戦いでローディー朝を破って勝利を収め、ムガル帝国の成立を告げた。この帝国はその後、19世紀半ばにイギリス帝国の台頭によって滅ぼされるまで、インド亜大陸を支配した。バーブルは1530年にアグラで没し、彼の遺志により遺骸は後にカーブルへ移送された。彼が生前に自ら造営した庭園「バーブル庭園（バグ・エ・バーブル）」に葬られ、現在も地元の人々や観光客が訪れる名所となっている。

アフガニスタンの歴史は、征服・文化交流・王朝支配が複雑に織り重なった精緻な歴史的織物であり、その形成には交易路と帝国の交差点という戦略的地理条件が大きく影響している。この地域は、古代のゾロアスター教思想やヘレニズム芸術、サーサーン朝の文化的遺産、そしてイスラーム黄金時代の知的成果など、さまざまな文明の要素を吸収し、独自に昇華してきた。モンゴルの侵攻やティームール帝国の興隆を含む幾度もの征服の波は、この地の政治的・文化的景観に深い刻印を残した。このような歴史の歩みを振り返ると、

アフガニスタンの発展は隣接する諸文明との相互作用によって深く形づくられてきたことが明らかである。